

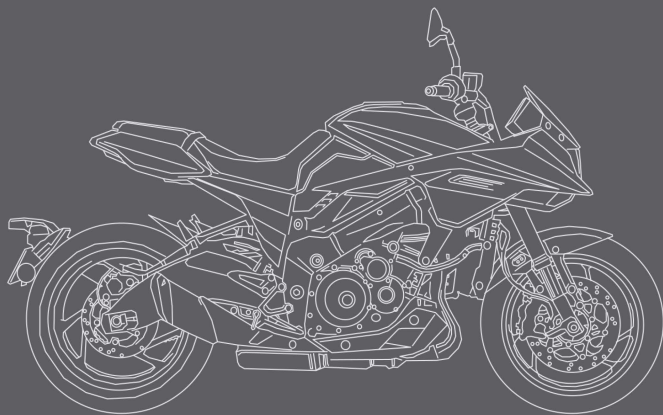
哲学に疲れた人へ届ける

# 哲学書

～正しさの公式～

Fukui Takuya

福井卓也



青山ライフ出版



## 目次

はじめに	7
第一章 哲学の必要性	11
第二章 正しさ、道徳的価値観、正義の概要	15
第三章 道徳的価値観や正義を伴わない正しさ	20
第四章 正しさの公式	22
第五章 手段の目的化	27
第六章 道徳的価値観を伴わない手法	30
第七章 手段としての目的と最終の目的	32
第八章 正義の優位性	34
第九章 人類の最終目的	37

第十章 自立の必要性	43
第十一章 教育の意義	45
第十二章 大衆の感覚	51
第十三章 夢を与えるということ	55
第十四章 生きる意味	62
第十五章 永続的な幸せ	65
第十六章 宗教の存在意義	67
第十七章 死との向き合い方	76
第十八章 不幸の正体	80
第十九章 理想的な幸せ	84
第二十章 感情のコントロール	90
第二十一章 見せかけの優しさと本当の優しさ	94

第二十二章 悩みへの対応	100
第二十三章 心の病について	108
第二十四章 優れた思考	111
第二十五章 見せかけと本質	115
第二十六章 後悔しない生き方	118
あとがき	120



## はじめに

この著書が目的とすることは、読者が少しでも正しく、少しでも優しく、少しでも幸せな方向へと進んでいくことを期待するものであるのだが、これから記載される内容は、決して専門的な哲学書に記載されているような高度な代物といったようなものではなく、少し考えれば誰もが思い付く程度のものでしかない。そのため専門的な哲学書を期待する人にとっては、少々物足りなさを感じる内容となってしまうかもしれないのだが、世に巡回る哲学書や啓発本、宗教論、幸福論といったものはどれも、言葉が難解で分かりづらく、解説書がなければ理解することが難しいようなものばかりで、実際に今後の参考にしようと思えるようなものがほとんど見当たらなかったことから、もっと簡潔で分かりやすく、要点だけをおさえた哲学書があっても良いのではないかと思ひ、筆を取った次第である。

例えば人生を、自動車で目的地に向かって旅をすることになぞらえた場合、最初に知っておくべきことは、目的地がどこにあって、何を目指してそこに向かおうとしているのか、といった「目的」の部分でなければならぬはずなのだが、多くの専門書は、目的地の座標やそこに

向かう理由を示そうともせず、車の選び方や整備方法、運転技術といった「手段」としての部分ばかりに目が向いており、その読者もまた、人より良い車に乗ることや、人より機械に詳しくなること、人より運転が上手くなることばかりに注目してしまっているのだ。

いくら人より良い車に乗っていても、いくら人より機械に詳しくても、いくら人より運転が上手くとも、目的地をしっかりと把握できていなければ、いつまでもずっと道に迷い続けることしかできないものだが、どれだけ性能の低い車に乗っていても、どれだけ機械の知識が乏しくとも、どれだけ車の運転がおぼつかなくとも、自分が目指すべき目的地をしっかりと見据え、着実に歩を進めることができているのであれば、その旅は恐らく、充実した楽しいものとなるに違いない。

そこで本書では、人が目指すべき目的地の座標やそこを目指す理由、その弊害となるものなどについて、できるだけ簡単な言葉で、できるだけ分かりやすく説明することを心掛けているのだが、言葉というものはその意味合いを自分自身がしっかりと理解できていなければ、自分の思っていることを相手にうまく伝えることなど到底できるものではないので、本編では全編にわたり、言葉の定義、意味合いといったものを、ことさらに、しつこく掘り下げるような場面が多く、読み進めていく上で少し退屈と感ずる場面もあるかもしれないが、もし退屈と感じ



る場面が続いたとしても、それは必要なこととして、最後まで我慢して読み進めて頂きたい。

前半部分では主に正しさという言葉の意味合いや定義付けといったことを中心に、後半部分では主に幸せの性質や幸せの弊害となるもの、気を付けておかなければならないことなどを中心に記載しており、一見すると前半部分と後半部分とは全く関連しない話のように思われるかもしれないが、全ての内容はあらゆる場面で相互に関連しあっており、筆者が最終的に伝えたいことは、あとがきを含めた後半部分に重点的にまとめられているため、そういった意味でも最後まで読んで頂くことを切に願うものである。

中には筆者と考えが相違する部分について、どうしてもそれを論破し、屈服させたいと考える人もいるかもしれないが、筆者は勝ち負けやマウンントをとるといったようなことに関しては、全くと違っていいほど興味がないので、その場合はもう、筆者の負けとして扱ってもらって良い。ただし感情的な勝ち負けを目的としたものではなく、正しい議論のための正しい反論、正しい反駁、共に正しい方向へと進んでいくための議論については歓迎するので、是非とも腰を据えて話し合ってみたいものだ。

いずれにせよ筆者が望むことは、筆者自身の正当性を誇示することではなく、この著書を読むことによって、一人でも多くの人が哲学に興味を持ち、一人でも多くの人が心穏やかに、

優しく、そして幸せな生き方をすることができるようになることでしかない。前置きはこのぐらいいしておいて、この著書を手にした者が実際にそのような方向へと進んでいくことができるようになることを心から願いつつ、話を始めることとしよう。